論　文　ニダバ (*Nidaba*) 30(2001), 104-113

話者の言語層とＦＳＰ

― チェコ・英・日本語における第３統語面の設定 ―

本　城　二　郎

０．序論

本論は、話者の言語層のＦＳＰ機能を探ることを目的とする。

１．発話文の（階）層構造の類型と３つの統語面の設定

述語動詞の文法・統語範疇とそれの意味拡張子（助動詞など）との連結・呼応関係は、少なくとも３つの言語（階）層と統語面を反映し、形式的にも伝達機能的にも、ある種の類型的特徴を示している。

１．１．総合的２層構造（Cz.）と分析的２層構造（E.）と膠着的４層構造（J.）

南の階層モデル（略して南モデル）によれば、文の構造は４つの言語層（段階）をなすと考えられている。膠着タイプの形態法を持つ日本語文は、カカリ成分とウケ要素との整然とした呼応関係により特徴づけられ、述語を中心とした入れ子型の重層構造を成している。構造の核→中心→周辺の観点から、描叙→判断→提出→表出の段階階層化および各段階の主要構造が抽出される。それぞれ、格（関与者）構造→認定構造→意向（提示・主題）構造→φ構造（受け手標識付与のみ）が対応する。描叙が事実描写的内容を、判断が内容の認定としての主格－述語関係を、提出は話者の内容に対する態度提示としての主題の区別を、表出は即時の伝達内容に対する　自／他の区別を、もっぱら扱うことから、前２者（ウチ構造）の抽象的言語内指向性、後２者（ソト構造）の具体的言語外指向性が特徴づけられる。

南1993の現代日本語文構造階層モデル：（南1993.p.54-61の簡略化モデル本城2000より）

南の４階層モデル（南モデル）を特徴づけるのは、下記の文構造の層状スキーマである。

←	述	部	以	外	→	←	述	部	→
応感	陳 | 時	場 | |	|	|	程状	動詞 ーラレル	ーナイ	ーウ	ーワ　ーナ
答嘆	述 ハ	所 ハ ガ	カ	ニ　ヲ	度態	ーサセル	ータ	ーヨウ	ーカ　ーヨ
詞詞	副 主	/対比/主	ラ	・	副副		ーダ	ーダロウ	ーノ　ーネ
	詞 題	格		ト	詞詞	形容(動)詞	ー(アル)ウ・ヨウ・マイ		ーゾ
	/主題/	/中立叙述・総記/				(擬似)名詞(+断定助動詞)	ー(アル)ダロウ		ーゼ

D(表出段階)<C(提出段階)<<B(判断段階)<<<A(描叙段階)　　>>>　　≫　　>

（注）< > << >> <<< >>>は、それぞれの段階の適用枠を表わす。

チェコ語（Cz.)は、屈折タイプ形態法を持つ言語で、その述語動詞語尾に特有な**異意義混交性**（つまり同一語尾に同時に複数の意味機能を持つ現象）により、文構造の層のかなりな程度の融合が存在し、各層固有の構造を明示的に設定することはかなり困難である。しかし、定動詞人称・数語尾の義務的付加および文頭主題成分の無標語順が示すように、いわゆる混合的３層構造つまり**総合的２層構造＋分析的１層構造**により特徴づけられる。**英語**（E.)は、分析タイプに属し、定動詞部分の数・人称表示の相対的弱化にも拘らず、主語成分の義務的表示および主題化主語の傾向から、いわゆる**分析的３層構造**をもつものと見なされる。他方、**膠着タイプの日本語**（J.)は、述語語尾における重層構造の顕在性つまりーガ成分・ーハ成分・受け手に対する文末述語要素の義務的呼応がかなり明示的であることから、整合的な**膠着的４層構造**を持つものと見なされる。

１．２．第１統語面：文の核構造の面（文形式的必須項）と第２統語面：中心構造の面（文意味的必須項）と第３統語面：周辺構造（発話文的必須項）

文構造の核→中心→周辺解釈から明かなように、ウチ構造からソト構造への層的移行と平行して、層の主要構造が設定され、各層がそれにより明示的に特徴づけられることになる。その結果、文法・統語面*では、主要構造に対応する統語構造の輪郭が明らかにされる。層の中心にある述語（動詞・形容詞・＋接続可能な助動詞など）全体が、文中の他の要素に対して持つポテンシャルな支配・呼応関係から、**第１統語面**：文の核構造の面（文の必須項による**関与者構造**）と**第２統語面**：中心構造の面（文意味の必須項による**主語ー述語構造**）と**第３統語面***：周辺構造（発話文の必須項による**主題構造**）の３統語面３統語構造が設定可能となる。言語的に見れば、第１・第２統語面は、面の接触手段が異なるものの、３言語とも明示的で、違いは第３統語面の設定性にある。チェコ語は無標Th-Rh語順、英語は文頭Th主語への傾向などにより分析的に、日本語はカカリーウケの呼応と文末詞連鎖から膠着的に、第３統語面を表示していることが分かる。

（注）* Poldauf(1966)の 'third syntactical plan' の訳語。

２．ＦＳＰ理論の概要

２．１．ＦＳＰ基本概念の定義

（発話としての）**文のTh-Tr-Rh*分割**を、**ＦＳＰ**と呼ぶ。ＦＳＰ実現のための手段、つまりＦＳＰ手段としては、語順や小詞付加や（動詞の）意味構造・関係や文脈（話言語ではＩＣ）などがある。通例、Th,Rh要素はさらに細分化され、各自情報価値を担い、文の伝達に寄与する。**情報価値**のことをCD、その**大小の度合い**をCD度、最少CD度の要素をTh、最大CD度の要素をRh、（通常は動詞により表わされる）中間のCD度の要素をTr、そのうち（通常は動詞人称・数・性語尾により実現される）**Th－Rh連結**の役割および文内容と文脈・言語外現実とを繋ぐ**文脈連結**の役割を持つ要素をTrPr*、（通常は陳述副詞や接続詞などにより実現され）同じく文脈連結の役割を持つ傾向にある要素をTrPro*

とし、（無標の伝達を示す）CD度漸進的上昇つまりTh-Tr-Rh語順をCD基本配列とし、一つの言語構成原理として定義したのがFirbasのＦＳＰ理論である。特殊な例として、述語動詞を欠く一語独立文の場合、動詞の表わすTrPrは、話し言語ではＩＣ、書き言語では句読法などで代用され、発話の要件に対応すると見なされる。以下にＦＳＰ要素とその基本配列をあげ、ＦＳＰ基本構造を概観する。

CD基本配列:　ThPr<ThPro<Th<DhTho<DhTh　<　TrPr<TrPro<Tr　<　Rh<RhPr

FSP要素:　Th-要素　Tr-要素　Rh-要素

+1*/Th-Rh連結/&+2*/文脈連結/

E: Today *our Prime Minister* will surely visit **America.** ☜ CD基本配列

ThPr　DTh　+1:TrPr +2:TrPro　Tr　Rh

（注）*Th:テーマ:語られる対象;Tr:トランジション:移行;Rhレーマ:伝える内容;
TrPr:移行プロパー;TrPro:移行プロパー志向

（注）+要素の機能に関し、筆者は語尾の単一機能性を示す膠着的形態法に見られる細分化にも対応すべく修正を加え、+1:Th-Rh連結および+2:文脈連結を設定した。

（注）太字はRhレーマ要素、斜字体は主語（の共指示要素）をそれぞれ表わす。

２．２．ＦＳＰの発話分析への適用

CD度の決定には、３つの要因が次の階層的優位関係において、関与すると見なされる：**線条性＜意味＜文脈**（＜話し言語の場合：ＩＣ）。最上位の文脈が働かない文脈独立の条件下では、線条性と意味との相関関係の結果、ＦＳＰ要素とそれらの動的意味の配列に関して２種のスケールが分類可能である。以下に、ＦＳＰ概念記法とそれに基づくＦＳＰ分析のモデルをあげ、以後それに従うことにする。

ＦＳＰ概念記法：　文要素

連結の種類　；意味スケール要素　，FSP役割

J: 多分、　*彼は*　明日　来る－かも知れない　時制(+1)&ムード(+2)&モダリティ(+2)

+2:TrPro　B, DTh　Sp, Rh　Q, Tr　+1　+2　/

／多分　明日　、　*彼は*、来る－でしょう。　... 来－ます。Cf. 来－たい。

+2:TrPro　Set, ThPr　B　Q, Tr　+1　+2　/　/

主語←ゼロ人称　1人称（人称制限）

ＦＳＰ文脈独立意味スケール：

1. Set-Pr-Ph:Ｐｒ（出現スケール）SetでPhがPrになる。Phへの出現記述パースペクティブ
2. Set-B-Q-Sp-FSp:Ｑ（属性スケール）SetでBが((FSpに)Spを)Qする。Bからの属性記述パースペクティブ

統合スケール⇩

Set-Pr-Ph=B-Q-Sp-FSp　SetでPhがPrになり、((FSpに)Spを)Qする。

例：Cz: V jedné zemi　žil　*starý král*

Set, DTh1　+;Pr, Tr1　Ph, Rh1

（ある国に、*年老いた王様が*住んでいた。）

Cz: *Ten král* měl **tři syny.** *Jeden* byl nemocen **asi dvacet let.**

B, DTh2(=Rh1) +;Q, Tr2 B, DTh3(≒Rh2) +;AofQ, Tr3 Q, Rh3 Sp, RhPr3

（王様には、*3人の息子が*いた。*一人の息子は*、**ほぼ２０年間**病気だった。）

Set, DTh2(=Rh1) Ph, Rh2 +;Pr, Tr2 B, DTh3(≒Rh2) Sp, Rh3 Q, Tr3;+

Jeden byl asi nemocen **dvacet let.**

+2:TrPro Q, Rh3 Sp, RhPr3

（*一人の息子は*、ほぼ、**２０年間**病気だった。）

（注）記号はFirbas(1992)に準拠。ただし、 +の細区別は筆者による修正。

Set(設定);B(担い手);+1(Th-Rh Linkage);+2(文脈Linkage);AofQ(属性付与);Pr(提出);Ph(現象);Sp(様述);FSp(更なる様述);ThPr(Thプロパー);ThPro(Thプロパー志向);Th(テーマ);DTho(通しTh志向);DTh(通しTh);TrPr(Trプロパー);TrPro(Trプロパー志向);Tr(移行);Rh(レーマ);RhPr(Rhプロパー)

（注）PNGVATMEはFirbasによる述語（特に定動詞）固有の文法カテゴリーを指し、それぞれが南の４段階と以下のように対応している。

PNGVE(人称・数・性・態表示子):描叙段階<<< >>>;ATME(アスペクト・時制・ムードモダリティ表示子):判断段階<< >>;

ME1(客観的モダリティ表示子):判断段階;ME2(主観的モダリティ表示子):提出段階< >

３．モダリティのＦＳＰ構造

文のTh-Tr-Rh構成は、事実描写的な陳述のみならず（陳述に対する）話者態度のモダリティ部分つまり叙述においても、付加的に関与していると見なされる。形式的には、印欧語の定動詞語尾や助動詞、日本語の文末〈推量・意志〉助動詞や終助詞・間投助詞などのウケ要素、さらに陳述副詞・応答詞・間投詞などがそれに相当する。話者の態度は、発話構成の際、陳述とは別の伝達野を構成するする根拠がある。あらゆる発話は、受け手に届いた段階で、話者の特徴が、有標・無標に拘らず、（ＩＣなども含め）反映されているからである。それ故、**モダリティ形式**も（陳述に付随した）二次的Th-Tr-Rh構成を実現する文部分と見なすことが可能である。筆者による英語（分析タイプ）・チェコ語（総合タイプ）のモダリティＦＳＰ構造分析*の結果、**二次的 Th-Tr-Rh構成は、陳述に付加・挿入されたミクロ構造**を持つことが提案された。印欧語タイプの文構造においては、形式的には法助動詞・陳述副詞、時制・モダリティ表示子TMEとしての助動詞・ムード表示子としての定動詞活用語尾などに、機能的には**無標のTrPr(o)要素**の中に、固有の伝達場を持つことが確認された。筆者は、これをモダリティＦＳＰ構造、その要素をモダリティＦＳＰ要素、構成原理をＦＭＰ(Functional Modal Perspective)と呼び、ＦＳＰメゾ構造の中のＦＳＰミクロ構造として、連続的かつ統合的に組み込めるような枠組みのモデル化を試みた。さらなる通言語的適用性を目指し、膠着タイプ形態法をもつ日本語のＦＳＰ構造の解明を試みた結果、南モデルの提出段階の位置づけが問題とな

った。明示的な提示構造をもたず、判断段階と提出段階の融合した２層（または３層）構造を持つ印欧語タイプの文が、文のTh-Tr-Rh分割を認定構造でしか実現できないのに比べ、日本語は提示構造を用い話者モダリティを実現しているという事実から、モダリティＦＳＰ構造の存在が保証されたのである。ここから、話者の言語層つまりモダリティによる文タイプ分類が可能となり、具体例の対照分析が試みられる。分類基準は、無標使用のモダリティ要素つまり定動詞語尾（日本語の終止形・命令形）、助動詞・助詞さらにその意味的拡張子としての陳述副詞・応答詞・間投詞など、の意味役割に基づいている。それらのＦＳＰ機能は、無標でTrPr(o)（+ 表記）になることを付記しておく。

（注）* 本城2000を参照。

モダリティによる文タイプの分類：

文タイプ

モダリティの文法手段：

[副詞的モダリティ]	[動詞的モダリティ]	
陳述副詞（＝法小詞）	定動詞活用語尾（接頭辞(Cz.)）	助動詞
応答詞・間投詞	・不定詞(Cz.)・語順	終／間投／接続助詞
態度述語・法（助）動詞・挿入文／語・呼格		(J.)
独立従属節・独立不定詞(Cz.)・付加疑問文・感嘆文		

対応するME要素のＦＳＰ機能：

DTh←周辺的TrPro ← 中心的TrPr → 周辺的

M^-/P^- M^o M^+

モダリティ表示の方法：

選択的モダリティ　義務的モダリティ（＝ムード）　自由モダリティ

[主観的モダリティ]　[客観的モダリティ]

ー話者の伝達意図を表わすー　ー話者以外によりなされる行為者の行為に対する関係を表わすー

対応する話者態度：

[評価的態度]　[意図的態度]　[任意的態度]

モダリティの意味機能：

正当・好み　平叙／疑問／命令／願望　義務／必要／当然／

平叙・否定文　疑問文　命令文（祈願文）

評価モダリティ　確実性モダリティ　願望モダリティ

モダリティＦＳＰ構造の分析モデル：

人称**Ｑスケール**（話者の判断）の対応例：

E: John will surely come to Prague.（<I am sure John will come to Prague.）

（ジョンは、きっとプラハに来るでしょう。）

分析： John will surely come do Prague.

MQ*, Rh　MAofQ*, Tr　：ＦＳＰミクロ構造

<<B, Th　+1　>>+2:TrPr<<　Q, Tr　Sp, Rh >>　：ＦＳＰメゾ構造

平行関係

MB*, ThPr　MAofQ, Tr　MQ, Rh

(I　am　sure)　(that John will come to Prague)

B, ThPr　AofQ, Tr　Q, Rh <<Sp, Rh(　)>>

（注）網掛の部分はモーダル意味カテゴリーを示す。

MB: Modality Bearer (=判断の話者)　MQ: Modal Quality

MSp: Modal Specification　MAofQ:Modal AofQ

具体例：

Cz: Zhruba řečeno, tady se hromadí aspoň 500 lidí.

+2:TrPro ≪ Set　+1;Pr, Tr　Ph, Rh　≫

J: ざっと（一見たところ）、ここに最低で５００人は集まっているようだ。

+2:TrPro　≪ Set　Ph, Rh　+1;Pr, Tr ≫ +2:TrPr

４．話者の言語層のＦＳＰ分析

モダリティ表示要素が本来的に持つTrPr(o)性が、話者の態度を表示することから、それらの多様な形式的バリアントの個別言語的特徴を探ることが必要となる。

４．１．話者の言語層の意味的・形式的分類

前章にあげたモダリティの意味分類とその形式との諸関係は、通言語的に汎用される形式の列挙とそのＦＳＰ機能の特徴づけを通じて、検証されることになる。

４．２．話者態度の表示形式

発話文に対して、その動作・事態の結果に関心を持つ（つまり所有関与する）人物（通例は話者）を導入する際、固有の文法的制約の範囲内で、３言語とも異なる文法手段を発達させてきた。話者の事態への関心・関与は、話者がとる知覚・判断・評価などの態度を通じて実現される。態度表示の文法形式としては、一般的には態度述語・法（助）動詞・法小詞・独立従属節など（中心的手段）の使用が、個別的には所有・関与・自由与格（Cz.）、間接受動構文(E.)、付加疑問文（Cz.E.）、－ハ成分＋授与動詞（J.）など、（周辺的手段）の使用が観察される。

４．２．１．態度表示子Ａ（中心的）とＦＳＰ機能

態度述語／法（助）動詞／法小詞（陳述副詞）／独立従属節

以下に、個別言語的分布を示す態度表示のための文法手段とそのＦＳＰ機能を検証する。その際、ＦＳＰ構造内において話者態度を表示するモダリティ範疇の体系およびそれを

構成する個別モダリティの体系内位置（つまり中心○／周辺＋／周辺－）を確認する必要がある。TrPr要素を構成するTME（時制・法表示子）の内、M：モダリティ範疇は、他の範疇とくにP：極性範疇と共に、（ＦＳＰ基本配列上、左隣接の）DThおよび（右隣接の）Trとの接触を通じ、一種の体系間連続性を担っている。具体的には、義務的モダリティ要素が中心を占め（M^{o}）、比較的安定し、形式的にもTrPr要素に特徴的な定動詞語尾・助動詞への傾向を示している。他方、左周辺を占める評価モダリティ（M^{-}）および左周辺の極性範疇としての確実性モダリティ（P^{-}）は、形式的にも、左隣接のDTh要素またはTh要素に特徴的な小詞（または副詞句）や名詞句への傾向を示す。また、右周辺を占める自由モダリティ（M^{+}）は、形式的には、右隣接のTr要素に特徴的な定動詞概念部分への傾向を示している。

ThPr　Th要素　DTh　TrPr　Tr

M^{-}　M^{o}　M^{+}

⇐ 評価モダリティ　義務的モダリティ　自由モダリティ ⇒

P^{-}

⇐ 確実性モダリティ

《　主観的モダリティ　》

代名詞・小詞（副詞句）　名詞句　定動詞語尾・助動詞　定動詞概念部分

法小詞・助動詞・態度述語・独立従属節・独立不定詞・付加疑問文・感嘆文・挿入語・呼格

（注）⇒は傾向・接近を示す。《　》はＦＳＰ基本配列における領域を示す。

①．態度述語：極性（P^{-}）を構成する確実性モダリティ（100%近い）による話者態度

態度述語または法小詞（＝陳述副詞）の例：

Cz: Je zřejmé, že* to je　chyba.　（注）* je+評価・判断の形容詞、žeの形式全体が従属節中において繋辞動詞je<být(~である)に内在する機能範疇の内の一つ確実性のモダリティを強化することから、それは自由／外的TrPrと見なされる。

+:TrPro(AofQ　Q)　B　+;AofQ　Q

/Zřejmě to je chyba.

+:TrPro

E: It is obvious that this is a mistake.

+:TrPr(B AofQ　Q)　B　+;AofQ　Q

/Obviously, this is a mistake.

+:TrPro　B　+;AofQ　Q

J: これが間違いなのは、明らかだ。

B(B　Q　+;AofQ)　+;Q,TrPr

/明らかに、これは間違いだ。

+:TrPro

Cf. Svoboda(1989),p.77

下線部は主として話者（場合によっては第３者）の態度を表示する言語層を指し、以下それに従う。

②．態度動詞起源の法小詞：確実性モダリティ（50% 以上）による話者態度の例：

法小詞（Cz.）・挿入語（E.）・法小詞＋終助詞（J.）

Cz: Je to myslím přesně tak. <小詞化< Myslím, že ~

+1;AofQ B +2:TrPro Q +:TrPr(私は~と思う)

E: It is exactly so, I think. <小詞・挿入語化<I think (that) ~

B +1;AofQ Q +2:TrPro +:TrPr

J: (思うに、) 正にそうーですーね。<~と思います。 ◻ 法小詞ー法助動詞の呼応

+2:TrPro (B-)Q +1 +2 +:TrPr

③. 独立従属節(ゼロ主節の従属節):自由モダリティの一種願望モダリティの例:

独立従属節kdybyまたは願望小詞kéž (Cz.)・独立従属節only ifまたは祈願文may (E.)・授与動詞の強調繋~サエクレレバ/ヤレバ+間投助詞 (J.)

Cz: Kdyby/Kéž by vás poslechl!

+2:TrPro Set +;(B-)Q

E: If only he listened to you! / May he listen to you!

+2:TrPro B +1:Q Set +:TrPr B Q Set

J: 彼があなたの言うことを聞いてーさえくれればーなあ!

B Sp +1;Q +2:TrPr

④. 陳述副詞(句)による評価モダリティの例:

Cz: Překvapivě vyhráli první cenu!

+2:TrPro +1;(-)Q Sp

E: Surprisingly, they won the first prize!

+2:TrPro B +1;Q Sp

J: 驚いたことに、彼らは一等賞をとった(ーのだ)! ◻ 陳述副詞句ーノダの呼応

+2:TrPro B Sp +1;Q +2:TrPr

⑤. 独立従属節による評価モダリティ起源の喚情モダリティの例:

独立従属節 jen když (Cz.)・陳述副詞のIC付加 (E.)・文末間投助詞 (J.)

Cz: JEN KDYŽ už jsi DOMA!<Jsem spokojen (s tím), jen když už jsi doma.

+2:TrPro (私は~でさえあれば満足だ) ◻ 独立従属接続詞jen kdyžによる喚情モダリティ表示

E: You are FORTUNATELY back home. ◻ 陳述副詞のストレス付加による喚情モダリティ表示

B +1;AofQ +2:TrPro Q

J: お前がもう家に戻ってい(さえす)ればーなあ! ◻ 文末間投助詞ーナア付加による喚情モダリティ表示

B Set Sp +1;Q +2:TrPr

(注)太字はストレス付加要素、大文字はIC付加要素、を示す。以下それに従う。

4.2.2. 態度表示子B(周辺的)とFSP機能

関与・所有・自由与格(Cz.)/所有構文(E.)/授与動詞またはーハ繋辞+受け身の助動詞(J.)、付加疑問(Cz.E.)

以下に、個別言語的分布を示す態度表示のための文法手段とそのFSP機能を検証する。

⑥．名詞句に対する所有関与：否定的態度［被害のインヴォルブメント］の例：

１人称与格（Cz.）：間接受動・所有構文（E.）；ーハ繋辞＋受け身の助動詞(J.)

		[所有関与者項]	[関与連結辞]	[被所有者項]
Cz:	Vylomili mi dveře.	mi	φ－繋辞	(oni) vylomili dveře
	+;(B-)Q Set Sp			
E:	I had my doors broken in.	I	HAVE－繋辞	door (being) broken in
	B +;Q(=A∘fQ)FSp(=B´) Sp(=Q´)			
J:	私は、部屋に押し入られた（のだ。）	私(の/に)	ハ－繋辞	部屋に押し入ら－れ－た(の)
	B Sp Q	+ ▷ －ハ繋辞＋受け身の助動詞：－ノダの付加による否定的態度／被害の受け身／性の強化		

＜－ハ＜／－ノ属格主題化／＜私の部屋に、押し入られた。

観察：チェコ語は、φ－繋辞機能の関与・所有与格（Set, ThPr)使用による関与者の背景化（Set-与格主題化）が、英語は、主語（B, ThPr)と目的語（Sp=B´, Rh)＋目的補語（FSp=Q´, Rh)を連結するHAVE-繋辞使用による関与者の背景化（B-主語主題化）が、日本語は、－ノ属格起源の－ハ主題（B, ThPr)＋受け身の助動詞使用による関与者の背景化（B-主題化）が、それぞれ観察される。

⑦．述語句に対する感覚所有関与：評価の態度（いわゆる難易文）の例：

Cz: Těžko se mi na tu otázku odpovídalo. Cf. 法小詞化した文頭dobřeže, jištěže

+:TrPro Set(=B´) Set +;(B-)Q(=Q´)

E: I found the question difficult to answer.

B Q Sp(=B´) FSp(=Q´)

J: 僕（に）は、その質問に答えるのが－難しかっ－た。

解釈1: Set B(set +;Q) +;Q

－には、 －のが－難し－かっ／く－あった。

解釈2: Set Ph(set +;Q) +2:TrPr +1;Pr

(Q, Tr=Rh) ▷ 述語（動詞）直前要素の強調レーマ化 Cf. 高見1995

観察：感覚受容者（チェコ語は与格・英語は主語・日本語は－ハ主題）を含む難易文は⑥の間接受け身構文への接近を示す。

⑧．付加疑問文：発話内容の確実性および聞き手に対する話者の喚情表示の例：

Cz: Nezmínil se o tom, že ne? ▷ 複合小詞：+2(聞き手［+確実性モダリティ］)

+1;(B-)Q Set +2

E: He didn't mention it, did he? ▷ タッグ：+2(聞き手+確実性モダリティ)

B +1 Q Set +2

J: 彼は、それにふれなかっ－た－ね。 ▷ 終助詞－ネ：+2(聞き手)

B Set +1;Q +2

観察：確実性モダリティの喚情性強化（チェコ語の複合小詞、英語のタッグ、日本語の

終助詞）により、発話の聞き手志向化が実現されている。

5．結論

話者の言語層のＦＳＰ機能および文法手段については、以下のような観察がなされた。３層（描叙・判断・提出）に対応し、それぞれ第１・第２・第３統語面の設定が可能である。４層膠着タイプの日本語（J.)対し、２層総合タイプ＋１層分析タイプのチェコ語（Cz.)や３層分析タイプの英語（E.)は 、定動詞部分に明示的な提出段階の層（モダリティの層）を持たない代わり、それを分析的に表示するからである。話者の態度が、主題構造を持つ第３統語面のモダリティ要素（およびその関与者）から構成されることから、主観的モダリティの列挙とそのＦＳＰ機能分析が求められた。その結果、ＦＳＰ機能はTrPr(o)を、動的意味機能は+2（文脈連結機能）を、それぞれ担い、主に次の４種のモダリティが関与的であることが確認された。中心的な義務ムードは比較的安定し、TrPr要素本来の定動詞語尾（Cz.E.J.の平叙・命令）や助動詞（J.の否定・願望）および助詞（J.の疑問助詞）への傾向を示す。評価モダリティと確実性モダリティは、隣接DTh要素に特徴的な小詞（Cz.）・陳述副詞（Cz.E.J.）・副詞句（J.）（およびそれらと呼応する文末助詞・助動詞（J.))への傾向を示す。喚情モダリティは、（小詞＋）独立従属節（Cz.）・強調のストレス付加（E.）・間投助詞（J.)への傾向を示す。個別言語的には、次の現象が顕著に見られた。チェコ語：法小詞または所有関与与格（Set,ThPr)の非人称文の頻用に伴う関与者の背景化（Set-与格主題化）とその結果実現される話者インヴォルブメント（否定的態度）、文頭要素の法小詞化や独立従属節の汎用による文頭モダリティ形式の発達；英語：陳述副詞や感覚受容者主語（B,ThPr)+知覚・感覚動詞の人称構文の汎用に伴う関与者の背景化（B-主語主題化）；日本語：評価・陳述副詞と文末モダリティの呼応および主語（Set,Th)＋評価形容詞／受け身助動詞［被害］さらに主題（B,Th)＋感覚形容詞の多用による関与者の背景化（B-主語／Set-与格主題化）。

参考文献：

高見　健一　1995.『機能的構文論による日英比較』（くろしお出版）

本城　二郎　2000.「現代日本語のＦＳＰ構造」 *Ars linguistica* vol.7

南　不二男　1993.『現代日本語文法の輪郭』（大修館書店）

Dušková, L. et al. 1994. *Mluvnice současné angličtiny na pozadí češtiny* Academia:Praha.

Firbas, J. 1992 *Functional sentence perspective in written and spoken communication*, New York: Cambridge University Press.

Grepl, M. et al. 1998. *Skladba češtiny*, Votobia: Olomouc.

Poldauf, I. 1966. 'The Third Syntactical Plan', *TlP* 1. Academia: Praha.

Svoboda, A. 1989. *Kapitoly z funkční syntaxe*, SPN: Praha.